

インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.115

2009年7月21日

発行所 兵庫教育文化研究所

〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

「新学習指導要領の移行期における実践を考える講座 2009 ～小学校外国語活動のあり方を考える～」 開催

7月4日(土)、ラッセホールにおいて「新学習指導要領の移行期における実践を考える講座 2009～小学校外国語活動のあり方を考える～」を開催し、県内各地より約50名が参加しました。(概要を兵教組ホームページに掲載)

第1部では大津由紀雄さん(慶応義塾大学言語文化研究所教授)による基調講演「外国語活動からことば活動へ」、第2部では「大津由紀雄さんとともに『ことばの学び』を考える」と題して意見交流をおこないました。(詳細については『こどもと教育』No.134に掲載予定です。)

大津さんは「小学校における英語の教科化」の問題点を指摘し、「母語を対象に育まれた『ことばへの気づき』が外国語学習の基盤として不可欠である」と、長期にわたる外国語の学びを見通した「ことば活動」の大切さを提起しました。

県内ほとんどの小学校が「外国語活動」を教育課程に位置づけている中、子どものゆたかな学びを保障する小学校外国語活動にあり方について、教研集会等の場で実践を報告しあいながら研究をすすめていきましょう。

参加者からの質問に対し、大津由紀雄さんから文書でご回答をいただきました

【質問】 中学校教員が小学校へ出向き、出前授業をするときに気をつけなくてはならないことは何ですか。

【回答】 その目的と目標を考えると答が出てくるはずです。中学校の先生が出向くのは、英語教育のプロだからです。しかし、中学校以降の英語教育と違って、英語活動は体系的な英語指導を目指していませんから、あくまで、「ああ、中学生になったら、こんなおもしろい体験ができるんだなあ。楽しみだなあ!」と子どもたちに感じさせることを目指して構想を練ればよいのです。どんなやりかたでやるかはプロにお任せします。

ただ、中学生と小学生では(さらに、小学生でも学年によって)、子供の精神的な発達段階に大きな違いがありますので、その点は十分に情報を得てから授業をするべきだと思います。中学生を相手に行っていることと同じことを小学生対象に行っても、無理であったり効果が薄かったりすることがあるでしょう。

【質問】 中学校の教員です。小学校英語と中学校英語の連続性を持たせるためにはどのようにすればよいでしょうか。

【回答】 教科化＝中学校英語の前倒しというのが1つの可能性です。しかし、理論的にも、現実的

にも、そんなことをしても益があるとは思えません。

中学校英語の前倒しではなく、小学校での「ことば活動」を充実させることで、中学校以降の英語（外国語）学習に必要な、ことばの基盤を子どもたちに与えてあげることができます。このことこそ、真の「小中一貫」と考えます。

もっと言うてしまえば、必ずしも「連続性」という考え方を持つ必要はないのかもしれませんが、小学校は小学校としての役割を、中学校は中学校としての役割を果たすことこそが大切なのではないのでしょうか。

【質問】中学校の英語の授業時間数が少ないように思いますが。

【回答】 今度の学習指導要領で少しだけですが、時間数が増えました。授業時間の確保はもちろん重要なことですが、予算の投下、教員の確保、教員の研修、少人数学級の実現など、英語教育にとって重要なことはたくさんあります。

わたくしは小学校の外国語活動に割く時間とエネルギーと予算を中学、高校の英語教育の充実に回すべきだと考えます。

【質問】「いまなら引き返せる」と言っていましたが、具体的に何をすればよいのですか。

【回答】 質問に直接答える前に、「どこへ」引き返すのかについてはっきりさせておきましょう。直前の状態は総合的な学習の時間における国際理解教育の一環としての英語活動（非必修）でした。したがって、「引き返す」を文字どおりとれば、その状態に戻ることを意味します。しかし、わたくしはもっと積極的に外国語活動を「ことば活動」に転じてしまおうと提案しているのです。「ことば活動」は領域扱い（必修）でかまいません。ここまでお読みいただいたところでおわかりのとおりが、「引き返す」先はもとあった状態そのものではありません。「引き返す」は教科化へ向かおうとしている流れを逆の方向に変えるという意味に理解してください。

これで質問に答える準備ができました。「引き返す」ために、やらなくてはならないことは、

- ① 教科化は学校英語教育全体を破壊してしまう可能性がある危険な選択肢であることを明確に認識し、その阻止のためにできる限りのことをする。
- ② ことばの力を認識し、教育においてことばがどれだけ重要な意味を持つものであるのかを認識する。これは単なるお題目として掲げているだけではだめで、ことばに関連するさまざまな研究成果や教育実践を踏まえて、ひとりひとりがことばの力を実感することが重要である。
- ③ ①・②の達成のために、教員のためのことばワークショップなどに積極的に参加して、自らを磨く。

【質問】小学校での英語活動による害とは何ですか。

【回答】 いろいろあります。

① わたくしが「小学校英語、三種の神器」と呼んできた、「歌と踊りと「日常会話」（＝決まり文句）」だけでは子どもたちの心を沸き立たせ続けることはできません。創造性が発揮できないからです。このことは小学校や中学校の先生がたなら、きっとご理解いただけるものと思います。

「三種の神器」に飽きてしまった子どもは英語嫌いとなります。

② ①の事態を避けるため、さまざまな工夫を凝らして、子どもたちの関心を2年間（あるいは、もっと長期間）つなぎ止めることができるよう努力している先生もいらっしゃいます。しかし、皮

肉なことに、そういう先生について子どもたちが中学校に入って体系だった学習をしなくてはならなくなると、「小学校の時にはあんなに楽しかった英語がちっともおもしろくない！」と感ずることになります。そういった事例はすでに数多く、届いています。

③ 小学生の頃から学ぶ英語ということばはきつと特別に価値のあることばに違いないという思いを子どもたちに植え付けてしまう危険性が高く、現代日本社会に鳴り響く「英語狂想曲」のファンを再生産させることになってしまいます。

④ 外国語教育にとって入門期の指導はなによりも重要です。その入門期の指導を、理念の整備もないまま、きちんとした訓練も受けていない学級担任に委ねてしまうことは重大な問題です。そして、この点をきちんと認識した学級担任の先生ほど思い悩んでしまうというのが現状です。

【質問】では、小学校での英語活動による「益なし」とはどういうことですか。

【回答】英語活動の目的を学習指導要領どおり「コミュニケーション能力の素地を養う」ということに置いたとしても、それが達成できるとは考えられないということです。百歩譲って、そういうことがある程度達成できるとしても、母語をとおして同じ目標に向かったほうがより効果的であることは先生がたが身を以て体験されているとおります。

ましてや、英語のスキルの育成ということを目標とした場合には、創造性の発揮に繋がる活動（つまり、英語の仕組みと働きを身につけさせる）をしていないので、益するところはありません。

【質問】英語活動を行う際、気をつけなければならない点は何ですか。また、行政側には何を求めればよいのでしょうか。

【回答】とにもかくにも、英語嫌いを作り出さないようにすることだと思います。繰り返しになりますが、適度に母語を織り込むことによって、活動の内容がずっと豊かになります。母語はなんといっても直感が利きますから。

同時に、行政側に対して、教科化に対して強い懸念を示し、外国語活動を「ことば活動」へ転換していくことを粘り強く求めることが大事だと思います。わたくしも違った立場からですが、がんばるつもりです。

【質問】「言語の普遍性と相対性」の相対性について説明してください。

【回答】言語の相対性とは、個別言語間に違いはあっても優劣の差があるということはないということです。個別言語はそれぞれ個性（「個別性」）を持っていますが、その個性もあくまで一定の制約（「普遍性」）の中でのものです。言い換えれば、各個別言語は普遍性が許容する限りにおいて個別性を持つことができます。その意味で、個別言語はすべて同質の体系と考えることができます。したがって、優劣の差はありません。

【質問】サッカー界で日本人の海外リーグでの活躍にはまだまだ大きな壁があるように思います。やはり「言語の壁」が大きいと思います。また、ブラジル人やポルトガル人が活躍できるのは「かなり似た言語」だからではないのでしょうか。日本語って特殊だから身につけにくいってことはありませんか。

【回答】「壁」はことばそのものだけでなく、母語を効果的に運用する力が大切です。ことばを使つての分析、ことばを使つての表現など、きちんとした訓練が欠けていると、なにを問われても、「ビ

ミョー」とか、「わかんない」とかのような表現しかできなくなってしまいます。サッカー界ではこの点についてきちんとした認識を持った指導者がいて、選手やコーチの育成プログラムの中に「言語技術教育」を組み込んでいます。興味のあるかたは田嶋幸三『「言語技術」が日本のサッカーを変える（光文社新書）』（光文社、2007）をお読みください。

なお、「日本語って特殊だから」という考えは間違いです。世界中には数千の言語がありますが、どの言語も一定の共通した仕組みを持っています。また、個々の言語に違いがあることは確かですが、その違いも一定の範囲の中での違いです。特定の言語が他の言語に比べて著しく特殊であるというようなことはありません。ことばを教える場合には、ことばに対して正しい認識を持つことが非常に重要だということを忘れないでください。→前問に対する回答参照

【質問】 受験勉強としての英語学習のままではコミュニケーション能力は養われないのではないのでしょうか。大学受験から英語(外国語)を外すことはできないのでしょうか。

【回答】「受験英語」という特殊な英語があり、そのための勉強をしていてもコミュニケーション能力が身に付かない、とお考えでしたら、それは間違いです。まず、「受験英語」や「入試英語」というような特殊な英語は存在しません。大学入試の英語の問題は、基本的な英語の力を問うものばかりですから、この程度の英語が理解できないでまともなコミュニケーションができるはずがありません。

実際の入試問題をご覧になってみてください。たとえば、東京大学の英語の問題などはよく練られた良問が多いと思います。そうした問題に対処できる力は「コミュニケーション能力」の育成に直接結びつくはずで

問題はむしろ、大学での英語教育で、かなり荒廃した状況にある大学が少なくありません。とくに、TOEIC などの対策に終始する授業や英会話学校などへの丸投げ（英会話学校と提携すること自体がいけないと言っているわけではありません。提携する場合には、大学での英語教育の理念を相手にきっちりと伝え、カリキュラムや教え方などについて、きちんとした議論が必要です。丸投げは禁物です）など、その存在意義に疑問を抱かざるをえない事例も報告されています。